

## Welcome to TOEFL Mail Magazine

いよいよ今年も半分が過ぎ7月になりました。梅雨明けも間近で、本格的な夏がやってきます。皆様いかがお過ごしでしょうか。

今月のTOEFLメールマガジンは、先月号に引き続き「次世代TOEFL教育支援ツール」の特集として現場の声をお伝えいたします。ETS開発のオンラインによるライティング自動評価ツール【Criterion】を導入されている智辯学園和歌山高等学校の声をお伝えいたします。

また、好評連載中の**言葉の玉手箱**、受験者インタビューに加え、23日開催の「TOEFL教育者セミナー2003夏～アカデミック・ライティングとその指導法～」の最終案内をお届けいたします。

じめじめした気候にも負けず、1年の後半戦も頑張っていきましょう!!  
では、今月のTOEFLメールマガジンをお楽しみください。

国際教育交換協議会(CIEE)  
日本代表部 TOEFL事業部



メールマガジンに登録する

### 巻頭特集：Criterion「現場の声」

前号に引き続き、既に「次世代TOEFL対応教育支援ツール」を導入している現場より、「利用者の声」として実際の使用例・利点などについて取り上げます。今回は、私立智辯和歌山高等学校の英語科レベッカ・ベンワ先生に、オンラインによるライティング自動評価ツール【Criterion】についてご寄稿いただきました。

### 世界で学ぶ！はじめの一步～オーストラリア～

CIEEは各国への留学を考えている皆さんを応援しています！このシリーズは、留学への「はじめの一步」を踏み出すための情報をお伝えしています。分かっているようで、実ははっきりと把握できていない各国の留学情報を、公的情報機関へ訪問して専門家に伺います。4回目の今回は、オセアニア地域への留学先として人気のあるオーストラリアです。オーストラリア大使館 教育部のライザ・ホフマンさんと同大使館内 教育情報センターの馬原明子さんにお話を伺いました。

### 言葉の玉手箱

Temple University Japan 川手-M 恩先生による言葉の新発見

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気づかされます。古来の日本人は言霊（ことだま）と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を動かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。  
ご好評いただいている連載「言葉の玉手箱」では、Temple University Japan 助教授の川手-ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説して下さいます。言葉の世界の面白さをお楽しみ下さい。

### TOEFL受験者インタビュー

今回のインタビューは、ちょうど1年前に突然、当事業部からベトナムへ旅立った女性です。帰国後、TOEFLに対しての意見を率直に伺いました。「いつでも海外に飛び立てる準備をしておきたい。」と素直に語るその横顔には、以前と少しも変わらない好奇心と、自分は自分であるという強いアイデンティティを感じました。



メールアドレスが変更になった方は、こちらのアイコンをクリックのうえ、ご連絡下さいますようお願いいたします。

必見！耳より情報（ご案内のセミナーは既に終了しています）



このたびCIEE TOEFL事業部では、7月23日（水）に東京で「TOEFL教育者セミナー2003夏」を開催いたします。実践的英語力強化において、今後更に重要となるアカデミック・ライティングとその指導法について、ETS開発のオンラインによるライティング自動評価ツール【Criterion】の導入事例とともにその重要性を検証いたします。



今回は前号に引き続き、既にツールを導入している現場より、「利用者の声」として実際の使用例・利点などについて取り上げます。今回は和歌山県の私立智辯学園高等学校の英語科教員であるレベッカ・ベンワ先生に【Criterion】についてご寄稿いただきました。

4月から実施しておりました次世代TOEFL対応教育支援ツールデモ体験セッションは、好評につき、引き続き8月末まで実施となりました。ぜひ、この機会をご利用下さい。

それぞれのツールに関する詳しいご説明は、[CIEEのホームページ](#)や[TOEFLメールマガジン16号](#)をご覧ください。

Rebecca Benoit (レベッカ・ベンワ) 氏 プロフィール



現：私立 智辯学園和歌山 英語科教員

B.A. and M.A. in Cultural Anthropology/Museology from Trent University

B.Ed in TESL/TEFL from McGill University

\* \* \* \* \*

カナダ・ケベック州とメキシコにおいて第二言語としての英語の教鞭をとられ、その後1998年来日。過去5年間は高等学校レベルの教育、特に入試にかかわる英語論文とリスニング分野に携わる。近年は小学校でも教鞭をとられています。専門分野はCALL/CAI。(automated assessment of writing, listening and speaking)

【Criterion】-オンラインによるライティング評価ツール-



Criterionとは、オンラインによるライティング自動評価ツールです。ETSは長年の研究およびデータ収集がe-rater®によるライティング評価プログラムの開発に成功しました。

インターネット接続環境であれば、職場やクラス、そして自宅からパスワードによるログオンで安心して自分のペースで学習できます。e-rater®により約30秒以内に客観的フィードバックとともに自動採点を行うプログラムです。米国では発売と同時に中学・高校・大学のライティングの授業と採点に採用されるなど好評を得ています。

自由英作文とCriterion

- Rebecca Benoit (智辯和歌山)

日本におけるエッセイ・ライティング指導

日本における、特に高等学校におけるアカデミック・ライティング指導はかなり困難であり、ある種の挑戦であるといえます。まず、第一の理由はクラスのサイズです。一クラス40名もしくはそれ以上という生徒数は、各々の生徒へ個別指導をするにはかなり難しい数で、いわば不可能に近いことです。更に、自由英作文評価はかなり時間のかかる仕事であり、特に、何百人もの生徒を受け持っていれば、自由英作文数にするとかなりの数になります。

第二に更に重要な要因として、自由英作文評価（採点）のできる人員が少ないという問題があります。また、1998年以来私が一緒に仕事をしてきた日本人英語教師（ALTs = Assistant Language Teacher）の多くが、自由英作文の採点はネイティブ・イングリッシュ・スピーカー（NESs = Native English Speaker）たちがする方がよいと考えているようです。しかし、日本で英語を教えているネイティブスピーカー達は、必ずしも英語教授（NETs = Native English Teacher）の資格を保有しているとは限りませんし、また、英作文添削のトレーニングを受けているとも限らないのが現状です（作文の評価に関しては、Cushing Weigle, 2002）。このような中で、日本におけるネイティブ・イングリッシュ・スピーカーの最大雇用機会であるJETプログラムに参加し、日本で英語教授に携わったALTに関して次のような報告があります。Finkleによると、年にJETプログラムに参加したALTで、TESLやTEFLの資格を保有していたのはわずか7%以下であったということです（2003）。また、JETプログラムはその好待遇から、「英語教授の才能がなく、日本に関する興味もほとんどない」人々をひきつけているという指摘もあります（Ota; 1997）。小学校における英語教育が始まり、ALTの採用数が増加するにつれ、こういった問題はますます大きくなると予想されます。

第三の理由としては、学校教育の中で1週間におけるライティング指導・練習に当てられる授業時間が十分でないことがあげられます。これは、日本の教育がリーディングや文法、リスニングに重点をおいた授業カリキュラムだからからです。このため、文部科学省がコミュニケーションライティングに重点をおいた新英語カリキュラムを推奨しているにもかかわらず、自由英作文の授業が軽視されてしまうことが多いのです。また、英語教師が直面する問題としては、文部科学省の認定する教科書リストには、自由作文専用の教科書が含まれていないということです。認定文法教科書の中には、英作文について触れられているものもありますが、「文法・文体、修辭に関して誤ったアドバイス」を与えたり、「手紙や要約を重要視していない」との指摘もあります。（Ross, 2002）

上記に色々な問題点をあげましたが、実は、1ヶ月に最低2時間のライティング授業時間を割くことができれば、この状態でも生徒達に英作文を教えることができるのです。EFLの英作文添削・採点やカリキュラム作成の経験がない場合でも、インターネットを使った英作文自動添削アプリケーションである【Criterion】を使えばいいのです。【Criterion】は100題以上の問題の中から選ぶ事ができ、生徒は自分の英作文を送信提出してから30秒以内で採点され、詳細なフィードバックと得点を得られるだけでなく、各得点レベルの見本作文も受け取ることができます。我が校の2年生は、1年間で【Criterion】の10題のTOEFLトピックに取り組み、これらのフィードバックを利用して飛躍的な進歩を遂げました。

### 智辯学園和歌山高等学校の【Criterion】利用事例：英作文カリキュラム

本校では、英作文指導とタイピングの練習をあわせた授業をした後に、【Criterion】を使った10回のクラスをする英作文のためのカリキュラムを組んでいます。95%以上の生徒が、Z会やベネッセの全国模擬試験の自由英作文問題において、全国平均を大幅に上回る成績を収めました（図1、図2参照）。このことから【Criterion】は本校における英作文プログラムに必要なものとなっています（英作文クラスには、自由英作文、文章要約、過去問題対策を含む）。

#### 1. 自由英作文

本校では毎週、英文表現における流暢さやスピードの訓練を目的として、10分の制限時間で自由英作文の練習をしています。2学期以降はこれを更に発展させ、ダイアログ・ジャーナルリング（生徒間で、書いた英作文を交換しお互いにコメントを与え合うこと）をしています。生徒は毎回、書いたトピックと10分間に書いた単語数を記録していきます。10分間で70から90語を目標としています。この自由英作文は成績評価の対象には入れていませんが、生徒が書き終わったら教室を回り、その作文を見て文法や内容に関する一般的なコメントを与えています。

#### 2. Story Response

5分から10分のシンプルかつ心温まる英語の物語を一度聞かせて、以下の問いに答えさせます。

1. How did the story make you feel?
2. What is the message of the story?

年間を通して、これらの問いは変わりません。聞かれる問題があらかじめ分かっているので、生徒は安心して新しい物語の理解に集中することができ、要約の練習をしながらExtensiveリスニング力の向上を図ることを目的としています。まず、ここではExtensiveリスニング (Macro/ Main idea listening) とIntensiveリスニング (Micro/ Detail/ Fact listening) の2つの違いをはっきりさせておく必要があります。生徒はExtensiveリスニングを課された場合、パニックに陥ることがあります。これは、耳に入ってくるすべての単語を理解しようとして、さらには訳して理解しようとするためです。実際の入試の場面では、辞書もなく、質問する教師も友達もいないわけですから、生徒の忍耐力を養うことは重要になってきます。つまり、生徒に必要なものはExtensiveリスニング能力であり、文章の流れを掴む訓練が必要になるのです。

生徒には、これらの物語 (本校では年間約7つの物語を使用) に関する質問に解答する前に評価採点基準について説明を与えます。これにより、生徒は採点基準を踏まえて答えを書くことができます。採点基準は、その時々により変更され、大学入試に見られるような「60語前後で答えなさい」や「2~3段落で解答しなさい」、「最低でも80語で」や「250~300語で答えなさい」といった指示を与えます。我が校では、指示どおりの解答をしない場合は20%の減点と設定してあるので、生徒は設問と指示を注意深く読む習慣もつきます。

### 3. 大学入試過去問題

本校の生徒は、期末試験やZ会・ベネッセ・駿台などが実施する模擬試験で、制限時間内に解答する自由英作文問題を解いています。加えて、年間最低5題の大学入試過去問題を与えています。これらの小論文は教師か業者による採点で、生徒は再考・書き直しはできません。

### 4. 【Criterion】

上記のペーパーベースの英作文指導も、もちろん生徒のライティング力の向上に役立つことは確かですが、もっとも効果的な成果をもたらしたものはETSの【Criterion】の導入です。われわれの"紙"ベースの指導は「結果重視型」であるといえます。これは、生徒が書いた自由英作文を評価し、返却するサイクルで、この際に、生徒の書き直しもありません。従ってこの方法ですと、生徒達はライティング能力を磨き上げる手段がないわけです。

一方で【Criterion】によるエッセイ・ライティングは、ESLやEFLの教育関係者 (Reid, Kroll, Leki, Ferris & Hedgecock) が支持する「過程重視型」のライティング指導が可能になります。

【Criterion】を使った授業では、生徒達が下書きを書いている間、提出する文章を作成している間、そして書き直している際にも、教師が教室を回りながら指示を与えられるという利点があります。智辯学園のライティングの授業では1回70分授業を2名の教員が受け持つので、50名いるすべての生徒と言葉を交わし、的確な指示を与えることが可能です。

本校にとって、【Criterion】はうれしい教材ですが、英作文の自動採点に対して懐疑的な英語教育関係者の方もいらっしゃると思います。Faculty Shackは【Criterion】について以下のように述べています。

"・・・フル装備の文法チェッカーであり、生徒の作文を文法の傾向とともに保存する優れたデータベースであること以外に言える事は、このプログラムの校正機能はかなり限られている。"

(Faculty Shack, 2003; for more on tricking Criterion, see Powers.)

残念ながら、このFaculty Shackの【Criterion】に対する評価は、生徒でなく、複数の教師による一度きりの検証に基づいています。私自身はETSでトレーニングされたスタッフではありませんが、この2年間に5,000本以上の自由英作文を読み、評価してきたなかで、【Criterion】の採点や文法、スペリングや文章構成に関してのフィードバックが自分の評価と一致しなかったことはほとんどありません。つまり、Faculty Shackらの調査結果とは対照的に、我が校の英語教師にとって【Criterion】は、表面的な間違いを添削する膨大な時間を節約でき、その時間を修辞法や内容重視の指導に充てることができるこれ以上ないツールです。【Criterion】が文章の論理的な流れに関する欠点は検知できないのは事実ですが、出題されたトピックに対しての解答がなされていない場合は、添削されません。(この場合、生徒はスコアを受け取れず、教師に指示を仰ぐようコメントが出ます。) 先程、私は【Criterion】の出す添削結果に疑問を感じたことはほとんどないといいましたが、それでもやはり、【Criterion】を導入する前段階での英作文に関する教師による指導と、彼らの文章作成の課程においての教師による指導は重要であると考えます。生徒達は、時として英作文についてどうしていいかわからなくなってしまうことがあります。このような時に必要となるのは、教師の的確な指導・指示なのです。

年間を通して、これらの問いは変わりません。聞かれる問題があらかじめ分かっているため、生徒は安心して新しい物語の理解に集中することができ、要約の練習をしながらExtensiveリスニング力の向上を図ることを目的としています。まず、ここではExtensiveリスニング (Macro/ Main idea listening) とIntensiveリスニング (Micro/ Detail/ Fact listening) の2つの違いをはっきりさせておく必要があります。生徒はExtensiveリスニングを課された場合、パニックに陥ることがあります。これは、耳に入ってくるすべての単語を理解しようとして、さらには訳して理解しようとするためです。実際の入試の場面では、辞書もなく、質問する教師も友達もいないわけですから、生徒の忍耐力を養うことは重要になってきます。つまり、生徒に必要なものはExtensiveリスニング能力であり、文章の流れを掴む訓練が必要になるのです。

生徒には、これらの物語 (本校では年間約7つの物語を使用) に関する質問に解答する前に評価採点基準について説明を与えます。これにより、生徒は採点基準を踏まえて答えを書くことができます。採点基準は、その時々により変更され、大学入試に見られるような「60語前後で答えなさい」や「2~3段落で解答しなさい」、「最低でも80語で」や「250~300語で答えなさい」といった指示を与えます。我が校では、指示どおりの解答をしない場合は20%の減点と設定してあるので、生徒は設問と指示を注意深く読む習慣もつきます。

### 3. 大学入試過去問題

本校の生徒は、期末試験やZ会・ベネッセ・駿台などが実施する模擬試験で、制限時間内に解答する自由英作文問題を解いています。加えて、年間最低5題の大学入試過去問題を与えています。これらの小論文は教師か業者による採点で、生徒は再考・書き直しはできません。

### 4. 【Criterion】

上記のペーパーベースの英作文指導も、もちろん生徒のライティング力の向上に役立つことは確かですが、もっとも効果的な成果をもたらしたものはETSの【Criterion】の導入です。われわれの"紙"ベースの指導は「結果重視型」であるといえます。これは、生徒が書いた自由英作文を評価し、返却するサイクルで、この際に、生徒の書き直しもありません。従ってこの方法ですと、生徒達はライティング能力を磨き上げる手段がないわけです。

一方で【Criterion】によるエッセイ・ライティングは、ESLやEFLの教育関係者 (Reid, Kroll, Leki, Ferris & Hedgecock) が支持する「過程重視型」のライティング指導が可能になります。

【Criterion】を使った授業では、生徒達が下書きを書いている間、提出する文章を作成している間、そして書き直している際にも、教師が教室を回りながら指示を与えられるという利点があります。智辯学園のライティングの授業では1回70分授業を2名の教員が受け持つので、50名いるすべての生徒と言葉を交わし、的確な指示を与えることが可能です。

本校にとって、【Criterion】はうれしい教材ですが、英作文の自動採点に対して懐疑的な英語教育関係者の方もいらっしゃると思います。Faculty Shackは【Criterion】について以下のように述べています。

"・・・フル装備の文法チェッカーであり、生徒の作文を文法の傾向とともに保存する優れたデータベースであること以外に言える事は、このプログラムの校正機能はかなり限られている。"

(Faculty Shack, 2003; for more on tricking Criterion, see Powers)

残念ながら、このFaculty Shackの【Criterion】に対する評価は、生徒でなく、複数の教師による一度きりの検証に基づいています。私自身はETSでトレーニングされたスタッフではありませんが、この2年間に5,000本以上の自由英作文を読み、評価してきたなかで、【Criterion】の採点や文法、スペリングや文章構成に関してのフィードバックが自分の評価と一致しなかったことはほとんどありません。つまり、Faculty Shackらの調査結果とは対照的に、我が校の英語教師にとって

【Criterion】は、表面的な間違いを添削する膨大な時間を節約でき、その時間を修辞法や内容重視の指導に充てることのできるこれ以上ないツールです。【Criterion】が文章の論理的な流れに関する欠点は検知できないのは事実ですが、出題されたトピックに対しての解答がなされていない場合は、添削されません。(この場合、生徒はスコアを受け取れず、教師に指示を仰ぐようコメントが出ます。) 先程、私は【Criterion】の出す添削結果に疑問を感じたことはほとんどないといいましたが、それでもやはり、【Criterion】を導入する前段階での英作文に関する教師による指導と、彼らの文章作成の課程においての教師による指導は重要であると考えます。生徒達は、時として英作文についてどうしていいかわからなくなってしまうことがあります。このような時に必要となるのは、教師の的確な指導・指示なのです。

Year	ALTs reporting TESL/TEFL Certificate	ALTs reporting Teaching Certification	Total ALTs
2003	201(7%)	304(10%)	3057
2002	178(6%)	314(10%)	3093
2001	115(4%)	218(7%)	3097
2000	80(3%)	104(3%)	3096
1999	196(6%)	298(10%)	2912
1998	224(7%)	350(11%)	2955
1997	224(8%)	354(13%)	2738
1996	183(8%)	307(13%)	2426
1995	168(7%)	355(14%)	2471
1994	144(7%)	302(15%)	2072
1993	136(7%)	219(11%)	2068
1992	236(13%)	268(14%)	1888

## IMPORTANT

This data is derived from the ALTs application form from certain boxes they check. Since this self-reported information is not verified by CLAIR/the JET Program, some applicants may report TESL/TEFL/teaching certification that they do not actually have.

Furthermore, the definition of "TESL/TEFL/teaching" certification is unclear and may include applicants who have taken a one-week course, to a full M.A./M.Ed. in TESL/TEFL. This information represents: "JETs still on the Programme and do not reflect the total number of JETs with teaching qualifications who have not renewed their contracts. In addition, the data is valid at the time of application and does not reflect the percentage of JETs who either gain qualifications between application and acceptance, and/or who earn those qualifications during their tenure on the Programme", although very few have the time or inclination to study long distance while working full-time jobs (Finkle, 2003)

1992-1999 data provided by Norman Eaton(n-eaton@clair.or.jp) CLAIR employee.

Electronic letter to Rebecca Benoit, December 9th, 1999.

2000-2003 data provided by Nicola Finkle(n-finkle@clair.or.jp) CLAIR employee.

Electronic letter to Rebecca Benoit, July 2nd, 2003.

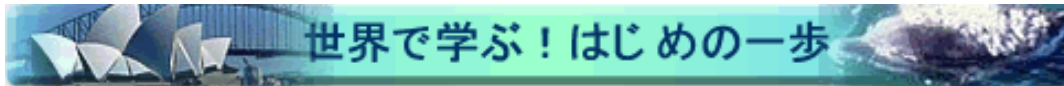
レベッカ・ベンワはTrent大学で文化人類学（学士）と博物館学（修士）を専攻、取得し、McGill大学で外国語としての英語教育法を専攻、教員免許を取得。カナダとメキシコで第二言語としての英語を教えた経験がある。母国語は英語であるが、他にフランス語、日本語、スペイン語を話す。

平成10年、文部科学省のJETプログラムで来日、公立高校にて3年間主に大学入試対応の自由英作文とリスニングを教える。平成13年、智辯学園に赴任、以来高校2年生、3年生に大学入試対応の自由英作文とリスニングを教える。平成14年、智辯小学校併設にともない、小学校における英語教育プログラムを立ち上げ、小学生の授業も担当し今日に至る。

She can be reached by e-mail at: [beccabenoit@yahoo.com](mailto:beccabenoit@yahoo.com)



レベッカ・ベンワ先生には、去る7月23日（水）、東京で開催されました「TOEFL教育者セミナー2003夏」（CIEE TOEFL事業部主催）において、「アカデミック・ライティングとその教授法」というテーマに基づき、上記ツールを利用したケーススタディに関する発表をしていただきました。



～ オーストラリア編～

オーストラリア大使館 (Australian-Education International-Australian Embassy)

オーストラリア政府 教育部 ライザ・ホフマン氏

教育情報センター マネージャー 馬原 明子氏

CIEEは各国への留学を考えている皆さんを応援しています!!

このシリーズでは、留学への「はじめの一步」を踏み出すための情報をお伝えしています。分かっているようで実ははっきりと把握できていない各国の留学情報を、公的情報機関を訪問して専門家に伺います。

4回目の今回は、オセアニア地域への留学先として人気のあるオーストラリアです。オーストラリア大使館の教育部のライザ・ホフマンさんと同大使館内の教育情報センターの馬原 明子さんにお話を伺いました。

オーストラリア大使館 オーストラリア政府教育情報センターについて

**Q.** オーストラリア政府教育情報センターはどのようなところですか？

オーストラリア大使館内にある **オーストラリア連邦政府の教育・科学・訓練省による日本における唯一の公式な情報センター**です。オーストラリア留学に関する情報として、ここには学校案内・留学に関する資料があります。資料の閲覧ができたり、学校案内の資料配布をしています。また、ビデオやCD-ROMによる学校情報閲覧や館内のコンピュータで学校やコースの検索も可能です。(いくつかの学校では、インターネットのホームページから入学願書がダウンロードできたり、入学申し込みができます。)



留学ガイダンスやグループカウンセリングもありますが、イベント情報や資料の請求は、主に **ウェブページ**から行うことができますので、遠方にお住まいの方も情報を得ることができます。オーストラリア留学に関する実用的な公式情報は、オーストラリア連邦政府の「**Study in Australia留学ホームページ**」からもご覧いただけます。このホームページは2003年より開始され、インターネット上の情報センターとして多言語で提供されていますので、日本国内に限らず世界各国の人々がそれぞれの言語でのアクセスが可能です。

その他、留学フェアやセミナーなどの開催や、各地の国際センターなどと共催でも実施しています。また、日本の高等学校や大学などへ出向いて学生対象や職員対象の説明会・プレゼンテーションも行っています。

オーストラリア留学の魅力

**Q.** オーストラリア留学の特徴・魅力は何ですか？

オーストラリアは140カ国以上からの人々が混ざり合う多民族文化の国です。オーストラリアの多国籍な食文化にも代表されるように、さまざまな民族・文化が混ざり合ったコスモポリタン社会での生活は多種多様な価値観を学び、グローバルな思考・行動する国際人育成には絶好の環境ではないでしょうか。母国語は英語ですし、治安がよく、生活水準が高いので学習には最適です。

また、オーストラリアの教育の特徴は、「創造性」「専門性」「技術性」を総合的に追求した質の高さです。オーストラリアの学習方法は日本とは異なりますが、教育機関に関しては、**政府に登録されているどの学校も留学生を受け入れる体制が整っている**ことも魅力の一つです。1989年頃からの政府による改革に伴い、すべての教育システムが統一され、留学生受け入れに関しては政府への登録が必須となりました。ESOS Act (The Education Services for Overseas Students Act) のCRICOS (Commonwealth Register of Institutions and Courses for Overseas Students) という制度は、留学生に適切な教育の提供を保証する国家法制定です。この登録はオーストラリア連邦すべてに共通で、政府の一定の基準をクリアし、質のよい教育課程と信頼できるサービスが提供できる環境になれば登録は受け付けられません。

その他に、オーストラリアは物価が安いので生活費や学費も安く上がるという魅力があります。つまり、生活しやすい国といえます。日本との時差も約1時間で、国際電話やインターネットによる連絡にも便利です。さらに、食べ物は多民族国家の影響のひとつとして、さまざまな国や地域の料理があります。オーストラリアには、『ヨーロッパ料理の伝統の上に、世界最高の食材を使い、アジアのスパイスをきかせた』独特の食文化があるといわれています。一般的な食卓に、パスタやリゾット、カレーやヌードル、ライス料理、アジア・中東料理などの国際色豊かなメニューが並びます。留学したら、是非さまざまな味覚を味わってみてください。

#### Q. オーストラリアで学ぶ学生の割合について教えてください。

1951年からオーストラリアで始まったコロンボプログラムの一環として、教育面における留学生支援があり、かつては、第三国のシンガポール、マレーシアやインドネシアからの留学生が多くいました。その間にも、70年代に宇宙飛行士の毛利守さんのように、いずれの国からも留学は可能でしたが、数はさほど多くありませんでした。しかし、政府による教育システム改革により、90年代頃からはその他の私費留学生にも留学しやすい環境・システムが整ってきたこともあり、最近では約20万人の正規留学生がオーストラリアで学んでいます。ここ1,2年で特に日本からの留学生も増えましたね。これは、日本におけるオーストラリアの知名度が上がったことも要因の一つだと思います。

日本からの留学の形態としては、高校の交換留学も盛んですが、90年代以降は大学・高等学校への私費留学生も増えています。しかし、主流は語学学校への留学ですね。つまり、短期留学や短期の語学研修です。英語のトレーニングは大学などへの進学者も受けますので、やはり英語学校への留学は圧倒的に多いです。3ヶ月以内であれば観光ビザのみで、学生ビザ申請の必要はありません。(但し、中・高等学校の正式交換留学の場合は学生ビザ取得が必要です。)ただ、その後に再度オーストラリアで学んでみたいという方や、もっと長く滞在して勉強したいという方が、長期留学へ形態を変えていくような状況もみられます。2001年には、正規の学生ビザで長期留学をした日本人学生の数は**1万1,740人(対前年比15%増)**でした。ワーキングホリデーや観光ビザで修学した学生数を加えると2万人以上になります。

#### Q. 大学やその他の機関で人気のある分野は何ですか？

**福祉や医療介護関係が人気**です。また、**アジア研究、環境学、教育学や言語学**も人気の分野であり、オーストラリアの得意とする学問でもあります。英語を公用語として多くの移民を受け入れてきた国ですので、英語教育にも長い伝統と経験があり、オーストラリアの得意分野とっていいですね。TESOLのコースなども、短期コースから正規の学位取得のためのコースまで様々なプログラムが組まれています。教育学についていえば、大学院レベルでは教員のための教育という面からも、現職の教員の方が短期間で留学して英語のブラッシュ・アップや今後のキャリアアップのために利用されることも多いですね。一学期の開始時期が、ちょうど日本がお休みの時期と重なることもあり、教員の方には利用しやすいのだと思います。

**Q.** オーストラリア留学に必要な条件を教えてください。



英語運用能力は、英語学校を除き、まず入学のために要求されている英語力が必要です。それぞれに必要な英語力は、留学の種類や学校によって異なるのできちんと確認してください。日本にいる時点で、要求されているTOEFLやIELTSの一定レベルをパスすれば問題ありませんが、日本を出る時点で英語力が要求レベルに達していなくても、現地で英語準備コースや語学学校に通うなどした後に、テストを受けて合格すれば大学などの教育機関に入学することもできます。

ひとつ注意点としては、オーストラリアの場合、**学生ビザの申請はCRICOS登録校でないといけません**ので、志望校が先程のCRICOS登録校かどうかを事前に確認してください。18歳以上の日本国籍をもつ方が学生ビザを申請する際には、早くて便利なインターネットで申請できるe-Visa申請が必須です。留学を希望する学校から入学許可証が届いたら、e-Visa申請をしてください。コース開始の3ヶ月（90日）前から申請が開始されます。詳しくはVisa課のウェブでご確認ください。

**Q.** オーストラリアで学ぶにあたっての重要な態度や心構えを教えてください。

また、日本にいる間にどのような準備ができますか？

どこの国へ留学するにもいえることですが、**目的意識をしっかりとつことが大切です**。まず、オーストラリアで何がしたいのか、何を学びたいのかを考えてみてください。最近は留学生の低年齢化が進み、周りから言われて留学するケースもありますが、自主的に自分が何かをしようという姿勢、自分のしたいことをしっかりと考えることが大事です。そして、やはり一番大切なことは、「常に前向きに」ということです。「自分は何のために留学をするのか？」をよく考えて、留学するからには「絶対に成功させる」という強い意志を持って取り組んでほしいですね。

**Q.** 海外で学ぼうとする人たちへメッセージをお願いします。

前向きな姿勢で、また、いろいろな経験ができるのが留学の意義でもありますので、日本で体験できないようなことを体験してきてください。また、留学は、他の国からの留学生との交流の場でもあります。そこから、逆に日本について聞かれることも多くあると思います。聞かれることによって、実は「日本人として日本についてよく知らなかった」ことを発見する場合もあるでしょう。そのような自覚をすることで、自分について再発見したり、日本を客観的に見ることができるようになり、日本について勉強しようと思うようになるかも知れません。つまりは、自分再発見の留学になるのではないのでしょうか。

日本との関係としては、オーストラリアにとって日本が第一の貿易相手国ということや、オーストラリアにおける外国語教育で一番盛んな言語が日本語であるなど、交流の深い国です。経済面においても留学生が行き来することで活発化しますし、教育面でも交流が深まることはお互いの国の将来のためになります。

他にも、オーストラリアの広大な自然や風土を満喫し、異なった生活習慣についても肌で感じ取る経験ができるはずですよ。少し目を見張れば、福祉サービスの発達したオーストラリアではバリアフリーの場所が多くあることに気づくでしょう。また、何度か出てきましたが、オーストラリアはいろいろな食文化が混ざり合った「おいしい国」です。いろいろなおいしいものを楽しんでください。勉強以外にもいろいろな経験・発見をしてきてください。

本日は、どうもありがとうございました。

(インタビュー：TOEFL事業部 秋山めぐみ/2003年7月1日)

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊（ことだま）と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。

ご好評いただいている連載「言葉の玉手箱」では、Temple University Japan 大学附属英語研修課程 助教授 川手-ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説してくださいます。言葉の世界の面白さをお楽しみください。



Dr.川手 ミヤジェイエフスカ 恩（めぐみ）  
(Megumi Kawate-Mierzejewska)  
-Ed.D.Temple University-

テンプル大学ジャパン集中英語課程 助教授  
2000年より、ETS公認コンサルタントを務める。

専門：中間言語語用論  
(Interlanguage Pragmatics)

### 第8回：言葉に付随する意味（その1）～"I don't think so." って？～

外国語を話す時は母語を話す時のように感情が伴うものなのだろうか。例えば、日本語の母語話者が英語を話す時、ある表現に対して、英語の母語話者が持っているのと同じ感覚を日本語英語話者も持っているのだろうか。それとも、外国語である英語は、ただの表現の媒体にすぎないのであろうか。今回は日本人英語話者がよく使う"I don't think so"に焦点をあてて考えてみたい。一体この表現は英語母語話者には、どのように解釈されるのであろうか。

ある大学の教養課程の授業をとっている時、教官が日本の道路交通法では、どれくらいアルコール度が検出されると法律で罰せられるのか、という質問をした。ちなみに、アメリカではアルコールの検出度を下げ、さらに安全運転を心がけるよう連邦政府が法律を通過させ州政府におろしてきたという。



さて、誰も質問に答えようとせずしばらく沈黙が続いていたので、そこにい合わせた日本に25年もいるという日本語が堪能な見習い教官が、おそらく日本では一口でも飲んで入ればアルコール度が検出されて（酒気帯び運転）何らかの形で罰せられるのでは、といった。そうしたら、そのあとすぐに、若い運転免許証も持っていないような日本人の学生が"I don't think so. I am sure certain amount of alcoholic beverage is allowed..."と真っ向から反対してきた。その見習い教官は、"I don't think so."という表現を大変不愉快に感じたらしい。自分の見解が正しいかもしれないのに、真っ向から否定されたということが腹立たしかつたらしい。よっぽど"I am quite positive."と言おうと思ったのだが、日本ではアルコール検出度など公開してないような気がしたのでやめておいた、と話していた。



それでは、なぜ"I don't think so."という表現がこのような結末を招いたのか考えてみたい。おそらく、外国語では母語を使う時と違い、言葉に感情がついていかないうちからこのようなことがおきるのではないだろうか。つまり、日本人英語話者が"I don't think so."というのを言われたとしても「随分はっきりものを言う人だなあ」くらいには思うが、不快になるほど腹立たしく感じることもない、ということからくるものに違いない。また、この場合、"I don't think so."という表現は日

本語からの転移が伴ったとも考えられる。おそらく、この状況を日本語にしてみれば「いや、そんなこともないと思いますが」というくらいで、言い方によってはそんなに強烈な否定にはならないことも多いので、そういう感覚で英語でもそんなに否定的には解釈されないと想定したのかもしれない。いずれにしても、この表現は英語ではかなり強い表現で人を不快にする表現のようで、英語母語話者が公の社会生活の中で、発言者に対して、この"I don't think so."という表現を使って自分の見解を述べているのを聞いたことがないような気がする。

以上、自分の意見を言いたい時は"I don't think so."と思っても、ぐっと我慢して"Well, I would say..."などと言ったほうがいいに違いない。

[Back to Top](#) 



今回の受験生インタビューは、丁度1年前に突然、当事業部からベトナムへ旅立った女性に、帰国後、TOEFLに対しての意見を率直に伺いました。「いつでも海外に飛びたてる準備をしておきたい。」と素直に語るその横顔には以前と少しも変わらない好奇心と自分は自分であるという強いアイデンティティを感じました。好きなことに向かってそれに突き進む...何かと理由をつけたがる自分を反省したインタビューとなりました。

ご好評いただきました「受験生インタビュー」は、今回が最終回となります。インタビューにお答えいただいた皆様、どうもありがとうございました。また、このコーナーを楽しみにしてくださっていた皆様、長い間どうもありがとうございました。TOEFL事業部では、今後も興味ある、役立つ情報をお伝えしていきます。

## 今月のInterviewee

氏名：匿名希望

年齢：30歳

性別：女性

TOEFL受験回数：3回

所属：旅行会社（ベトナム勤務）

将来の夢：小さなことでも、平和につながる仕事をしたい

### Q. TOEFLを受けた理由は何ですか？

目的は自分の実力試しですが、就職の為にも必要だと思い受験しました。

### Q. 実際、コンピュータ版TOEFLを受験してみてもいかがでしたか？

コンピュータ試験になって、かなりテスト環境が良くなったと思います。周りに惑わされず、問題に集中できる環境ですね。TOEFLは留学に必要な試験のひとつなので、問題の内容も学問に関するものが多く、語彙力のない私にとっては大変難しく感じます。特に私には、読解は時間が短く困難です。受験英語などと違い、語彙、文法、リスニング、読解力など、すべての分野にバランスの取れた力が必要な為、真の能力が試されるテストだと思います。いつも試験終了後は、どっと疲れがでます。

### Q. 他の英語試験（TOEIC/英検など）を受けたことはありますか？

昔はTOEICを受験していました。TOEICはTOEFLと比べると、比較的日常会話的な問題が多く、容易に感じました。

### Q. 普段は、どのように英語の勉強をしていますか？

ベトナムの旅行会社で働いていたため、仕事や日常生活でも英語を使っていました。しかし、レベル的にはお互いの意志の疎通が出来ればよいという程度なので、なかなか進歩しなくて困っています。わからない単語があれば辞書で調べたり、英字新聞を読むなどを心掛けています。

**Q. 英語に対しての思いを聞かせて下さい。**

今、英語は必須の時代になっています。ネイティブスピーカーとも会話できる程度の英語力を身につけたいですね。語学の習得に終わりはありません。  
また、いつでも海外に飛び立てる準備をしておきたいという気持ちが強くあります。その為にも、定期的にTOEFLの試験を受け、自分の実力を確かめておきたいと思っています。世界に通用するテストなので、客観的に自分の能力を判断してもらう為にも有効です。

本日は、お忙しいなか本当にありがとうございました。

(インタビュー：TOEFL事業部 渡邊伸雄)

[Back to Top](#) 

このセミナーは、大盛況のうちに終了いたしました。皆様のご参加、誠に有難うございました。

TOEFL教育者セミナー2003夏 実施のお知らせ  
～ アカデミック・ライティングとその指導法 ～

教育者レベルでの英語教育に関する情報交換の場としてご活用ください！！

CIEE TOEFL事業部では、TOEFL教育者セミナーを以下の通り開催いたします。  
参加をご希望の方は、下記までご連絡下さい。皆様の参加をお待ちしております。

 主題：「TOEFL教育者セミナー2003夏」～ アカデミック・ライティングとその指導法 ～

- 日時： 平成15年7月23日（水）18：30～20：30  
（その後、簡単な懇親会を予定）
- 場所： [東京ウィメンズプラザ](#) 視聴覚室  
（東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山）
- 内容： 近年の英語教育において様々な改革が行われていますが、その中で特に注目されているアカデミック・ライティングに焦点をおき、その重要性和教授法に関して公立・私立高等学校それぞれの英語科教員による現場の声を通して検証します。  
また、ETS開発のオンラインによるライティング評価ツール【Criterion】の活用法を含め、英語伝達能力育成に向けての指導方法についても探ります。

ETSよりご挨拶

- ・・・ エグゼクティブ・ディレクター Amber Cheng

「TOEFLの動向に沿った英語教育」

- ・・・ Temple University Japan 助教授 川手-ミヤジェ  
イエフスカ 恩氏

高等学校におけるアカデミック・ライティング指導法

- ・・・ 県立 甲府第一高等学校 教諭 田中 美香氏  
・・・ 私立 智辯学園和歌山高等学校 教諭 Rebecca  
Benoit氏

[Back to Top](#) 